New Englander in Japan より

同志社人物誌　(66)

D・C・グリーンと創業期の同志社

茂　義樹

まだ先のことであると言い続けてきたが、再び今年も問い合わせがあったので、とりあえず彼の横浜時代の書簡から、創業期の同志社をめぐる話題を中心に取り上げてみることにした。

1

D・C・グリーン (Daniel Crosby Greene, 一八四三―一九一三年) は創立間もない同志社で、一八八〇年代の数年間にわたり教鞭をとり、その間同志社の綱領や宣教師館問題で同志社とアメリカン・ボードとの対立の渦中に身をおいた宣教師のひとりである。また、彼はアメリカン・ボードから最初に日本に派遣された人物で、今世紀初頭まで在日アメリカン・ボード宣教師団を代表する人物のひとりであった。

筆者はD・C・グリーンの生涯を、彼のアメリカン・ボード宛書簡から追う努力をしているが、その歩みは遅々として進まない。ようやく数年前に初期神戸伝道 (一八七四年の神戸公会設立) に関する彼の行跡を纏めおえ、目下横浜における新約聖書共同翻訳事業 (一八七四―一八八〇年) についてその作業を進めている所である。数年前から本誌編集部より同志社とD・C・グリーンについて書くように求められ、その度に筆者のグリーン研究が同志社時代 (一八八一年以降) に進むのは

2

まずそれまでの彼の歩みを見よう。

彼はアメリカン・ボードの幹事 (Secretary) デビット・グリーン (David Greene, 一七九七―一八六六年) の子供としてマサチューセッツ州ロックスベリーに生まれた。母方の祖父ジェレマイヤ・エバーツ (Jeremaiah Evarts, 一七八一―一八三一年) は高名な弁護士であるが、アメリカン・ボードの創設 (一八一〇年) を検討する会合に参加した唯ひとりの信徒であり、創立以降一八三一年の彼の死去に至るまで、ボードの主席幹事 (Senior Secretary) を勤めた。その後を娘婿のデビット・グリーンが引き継いだのだった。またボードの機関誌「パノポリスト (*Panoplist*)」の編集者でもあった。一八六九年、ボード幹事N・G・クラークが日本伝道に最初に派遣する人物に、ベテランではなく、弱冠二七歳の

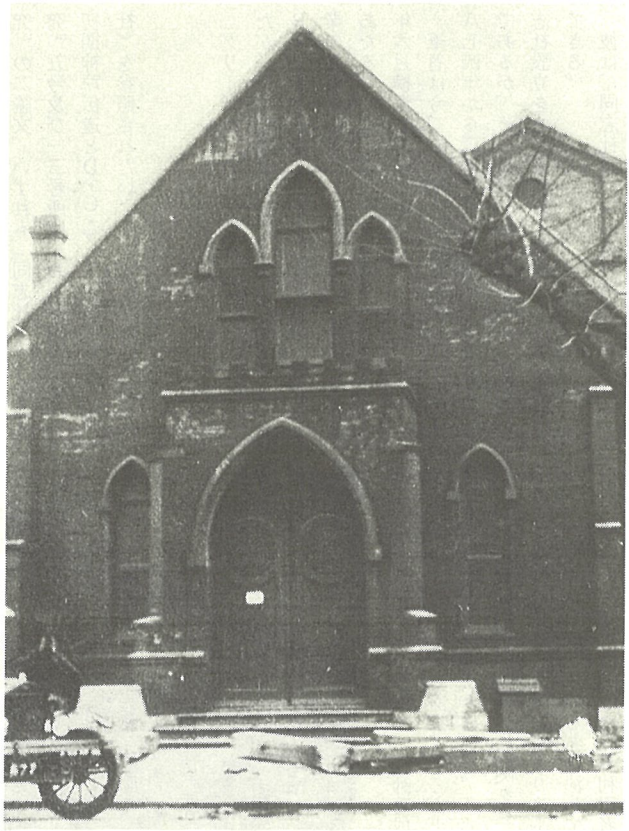
D・C・グリーンを登用したのは、彼の内に流れる宣教師精神に信頼を寄せたからであろう。

D・C・グリーンは高校卒業後、ミドルベリー・カレッジにいったん入学後、ダートマス大学に転入学。一八六二年には約四ヵ月間南北戦争に従軍しながら、一八六四年同校の学業を終えた。ウィスコンシン、イリノイ両州で、二年間教師を勤めた後、牧師になる決意をもちシカゴ神学校に入学した。しかし、教授陣や蔵書への不満から、アンドーバー神学校に転校した。宣教師になる決意はシカゴ時代にアメリカン・ボードの総会に出席して以来固めていた。一八六九年、アメリカン・ボードの日本伝道開始に際して、同年神学校を卒業したばかりの彼が、最初の派遣宣教師に指名されたのである。彼は一八六九年一一月三〇日妻メリー・ジェーン・グリーン(Mery Jane G. 一八四五―一九一〇年)とともに横浜の土を踏んだ。

彼らは最初、江戸伝道に当たるつもりで築地に落ち着いたが、まもなくボードの中国在住宣教師ヘンリー・ブロジェットに勧められて神戸伝道を決意し、現地視察後に、神戸に移ったのは一八七〇(明治三)年三月であった。

彼は神戸に住む最初のプロテスタントの牧師として、まず外国人礼拝を始め、同地在住の外国人の牧会にあたった。そして一八七二年、チャペルの献堂に合わせて、神戸ユニオン・チャーチを創立させた。このチャペルは写真で見るかぎり、後日彼が設計したといわれる同志社のチャペルとよく似た外観をしているので、彼の設計とも思われる。

よくグリーンの設計技術を問われるが、経



神戸ユニオン・チャーチ(神戸ユニオン・チャーチ提供)

歴から彼が建築設計を学んだ確証は得られない。祖父トーマスが建築家で、ボストンのチャールズリバー・ブリッジの架橋工事に関わったというのが、ひとつの関わりにではあるが。

さて、グリーンの神戸定住当時は切支丹禁制の高札が掲げられており、日本人伝道はできなかった。しかし彼の家を訪ねて来た青年に英語聖書を教えたことから、英語とキリスト教に興味をもつ者も生まれた。市川栄之助は獄中死したが、澤山保羅はアメリカ留学に向かった。松山高吉、前田泰一は宇治野村に英語学校を開いて、グリーン、デイヴィス(J・D・Davis、一八三八―一九一〇年)ら宣教師を教師を招き英語と聖書のみならず歴史、地理、算術等の教授を受けた。デイヴィスはこの学校こそ同志社の原点であったと、回顧している。

一八七三年(明治六)、高札が撤去されキリスト教伝道が自由になると、堰を切ったように日曜礼拝、安息日学校、聖書研究会、祈禱会等の集会が開かれた。そして先の英語学校、塾(神戸女学院の前身)、三田からの人々、それに一般市民らが集まり、信仰と交わりを深め、一八七四(明治七)年五月、まず一一名が受洗し、神戸公会(教会)が設立されたのである。関西最初のプロテスタント教会であった。

(以上の初期グリーンに関する研究は竹中正夫教授の「ニューイングランド・ピューリタニズムと日本伝道」、「D・C・グリーン研究」の二論文、いずれも『同志社アメリカ研究』五号及び一三号所収、および拙著『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』(新教出版社)を参照されたい。)

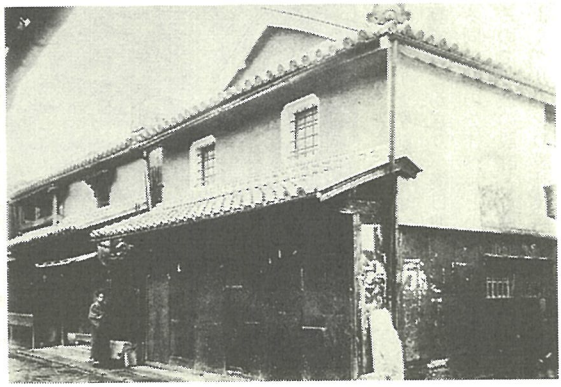
3

グリーンは、神戸教会最初の仮牧師であったが、既に宣教師会議でJ・C・ヘボン、S・R・ブラウンらとともに新約聖書共同翻訳事業の委員に指名されていたので、聖書翻訳にあたるために、松山高吉を伴って、一八七四年六月横浜に移っていく。

筆者は今、彼の横浜時代の書簡の前半(一八七四年から三年)に目を通しているところであるが、その書簡のはしばしから、彼が同志社設立を心から望み、支援したことが理解できる。

彼は、同志社設立以前の段階である一八七五(明治八)年三月の書簡で、牧師養成のためには特別なカレッジが必要である、と幹事クラークに説き、次のようにいう。

日本の官立、私立の高等教育機関を見ると、それらの学校の教師の大半は反キリスト教であり、道徳的にも優れているとは決して言えない。学生たちは大酒飲みや売春利用者によ



最初の神戸公会(神戸教会提供)

って教育されており、そうした教師候補者を送ることは問題がある。

そして次のように理想のカレッジについて語る。

われわれは悪を憎み、徳を愛させることに力をもった学校、熟練した学識が信仰によって人をより強くし、人の愚かさが神への献身によって、人を熱くさせることを世間に証明してくれる学校を建てたい（一八七五年三月クラーク宛書簡）。

また続けて、今一〇万ドルがあればそうした大学を始めることができると述べると共に、さらに宣教師は教育にあたることができないだろうから、学校の管理、運営に当たるべきだとして、適当な教授の人選をアーモスト大学シーリー教授らにまかせてはどうだろうと、提案している。ここでグリーンが考えているのは、神学校ではなく、カレッジのことをいっている。これは次に紹介する書簡にもつながる問題であった。

4

同志社設立直前の書簡では、アメリカン・ボード幹事N・G・クラークがカレッジにあたる普通科（英学校）を不要とし、牧師養成のトレーニング・スクール（神学校）にしてはどうかと言う主張に反対して、新島襄、デイヴィスの考えを支持して次のように言う。

トルコや中国では牧師訓練学校のみで良いだろうが、日本では誰もそれに賛成をしない。普通科には、質の高い教育を母国語で受けた青年を集めることができる。彼らの多くは政府の役人になることを望んでいるが、その彼らを牧師へと献身させることを、われわれは望んでいるのだ、と。

牧師養成に関して、それをカレッジの一コースだけで行うことは、牧師候補者への教育としては不十分であろうが、今のところそれで我慢せねばならない。だからといって、デイヴィス氏が説教を低く見積ったり、宗教的な霊的要素や、逆に知的な要素を過大評価しているのではない。彼は学校に健全な力を与える人物となろう（一八七五年一〇月クラーク宛書簡）。

ここではよくいわれるように、同志社が日本語名でいうように「英学校」であったのか、宣教師がいうように牧師養成学校、すなわち「トレーニング・スクール」であったのか、が問題となっている。それは新島襄と宣教師の対立といわれるが、そうではなく、グリーンをはじめ日本ミッションの宣教師は、同志社英学校を普通教育の場と認め、牧師養成はそれに付随する一コースと考えていたことが明かとなる。それはむしろ、先に引用した書簡が言うように、日本の教育が知的には進んでも、牧師候補者が学ぶにふさわしい内容ではないことから、とりあえずは普通教育を推進し、牧師養成にはその一コースを充てると言う考えで臨んだことを物語っている。グリーンら宣教師たちも、新島やデイヴィスのこうした考えを適当と判断したことを意味している。

一八七七（明治一〇）年になると同志社の教師にL・L・ジェーンズ（L. L. Jenes, 一八三七―一九〇九年）を招こうとする案がでてくる。グリーンはかなり長い時間をかけてジェーンズと話合い、かっては彼に偏見を抱いていたがそれは氷解し、彼と自分との教育に対する見解が一致したとして、彼を同志社の教師に好ましい人物と認めている。何よりも彼に対して、かっての（熊本洋学校出身）生徒たちの信頼が厚いことを伝える。もし何か逆風が吹いてもデイヴィス氏とジェーンズ

氏がいれば、同志社は問題を乗り切れるだろう、と言う（「一八七七年五月クラーク宛書簡」）。そこまでグリーンはジェーンズに信頼を寄せている。

一八七七年一〇月のクラーク宛書簡ではジェーンズ問題が再び取り上げられるが、そこでジェーンズがボードから貸し付けられた金、一五〇〇ドルを返さないで、本国に帰国したことで、グリーンらが驚いている状態が伝えられている。宣教師たちは、ジェーンズが同志社教師になる準備金としてこの金を彼に貸した、というのである。しかし、彼はそれを返さないで帰国してしまう。ジェーンズはこの一件で、同志社の教師になることのみならず、アメリカン・ボードとの関係を決定的に壊すことになってしまったのである。

一八七七年七月のクラーク宛書簡では、新島が同志社で聖書を教えないという契約を政府と結んでいたことが取り上げられ、グリーンは弁明に努めている。

同志社が聖書を広めるための学校であることは、よく知られた事実である。従って聖書の授業に制限があっても、それが学校の働きを妨げるものではない。その誓約は新島を含むわれわれ宣教師と京都府との問題である、と。そして次のよう続ける。

もし聖書教授をする学校を政府が許可したならば、それは政府がキリスト教を特別に承認したことになる。それ故政府は、同志社に聖書教授を許可しなかった。しかしそれ以外の全てを許可したのだ。そうしておけば政府は、われわれはキリスト教学校を許可したのではない、仮に聖書が教師の自宅で教えられていても、学校外での教師の行為を規制する権威をわれわれは持たない、と言うことができるだろうと。

つまり聖書が学内で教えられないことを問題にしようとする宣教師やボードに対して、グリーンは聖書が学外でしか教えられていなくとも、同志社がキリスト教学校である事実には変わりがないことを強調している。教室で聖書が教えられるかどうかだけではクリスチャン・スクールの決め手にはならない、と言うグリーンの主張は、説得力をもっているといえよう。

5

一八七七年八月のクラーク宛書簡では、自給問題をめぐって同志社に対する一つの批判が展開される。それは同志社の学生のための奨学金の募金活動がアメリカで行われているのを聞いて、残念であるとしていることである。同志社は学生の援助のために、やりすぎているのではないか、とグリーンは言う。これは新島とデイヴィスの援助を求める考えへの痛烈な批判である。

自給とは宣教師費用以外のすべての経費が日本人キリスト者によって賄われる状態をさし、同志社の学生に対する奨学金は日本の教会に任されるべきであると、グリーンは主張した。

自給論者H・H・レビットの主張は余りにも極端であるとして批判するグリーンではあるが、新島襄らのアメリカから受けられるものは、すべて受け入れていこうとする姿勢には強い批判をもっていた。

彼は日本の教会自給と同志社の自給を考えつつ、キリスト教学校同志社の発展を真剣に望んだ人物のひとりであった。

（梅花短期大学教授）